

新潟県小学校
校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区幸西3-3-1
じょいあす新潟会館2階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂
カット…細井 一貞
(上越 直江津南小)



新潟県小学校長会 対策部長 有本 秀雄

人的支援体制や教育環境の
一層の充実に向けて

新潟県小学校長会対策部の調査によ

ると、本年度県内の公立小学校における通常学級数は四、四〇七学級、在籍児童数は一〇四、〇八六人、前年度に比べそれぞれ六十一学級、一、三三四人減少しています。特別支援学級数は一、〇六六学級、在籍児童数は四、六〇五人。前年度に比べそれぞれ九十五学級、四三五人増加しています。

通常の学級における特別な支援を要する児童の在籍率は、平成二十四年度の国による発表の6・5%に対して、本年度県内の状況は7・9%でした。

以上を踏まえ、特別支援教育に関わる人的支援体制を一層充実する市町村が増えており心強さを感じます。

一方、記録的な猛暑を受けて普通教室へのエアコン設置や、プログラミング教育を進めるための教育環境の整備に目が向けられています。ソフト面の予算が必要以上に削減されることのないよう注視する必要があります。

人的支援体制や教育環境の一層の充実に、予算と人材の確保が必要です。

財政的にも人材的にも厳しい状況にある今、私たち校長には教育委員会はもとより首長部局とも、より強固な絆の構築が求められます。

教育のスペシャリストとしての側面と管理職のゼネラリストとしての側面の両面から、実施されている施策に関するエビデンスの提供や学校を拠点にしての地域創生など、新たな施策についての提言等を通して、行政組織のパートナーとして校長が能動的に信頼関係づくりに尽力することが肝要ではないでしょうか。

予算等の要望は相手のあることですので、百戦百勝はあり得ません。しかし、よりよい学校づくりを目指して百戦錬磨する校長の姿を、学校内外に示していきたいものです。

AIの進歩、IoTの広がり、ビッグデータ解析等の先端技術の開発により、今後、世界は国境を越えた交流がますます盛んとなり、多様性が高まっていく。

そこでは、様々な価値観の人々と協働していくことが重要であり、これまで以上に論理的思考力が必要となる。

このような社会的背景の下で進められている国研の指定研究「論理的思考」を受け、二年目の最終年次となった。

二 研究概要

一年次、子どもたちの論理的思考力を伸ばすために、今の授業をどう改善していくか原点に立ち返り検討した。

当校児童の「相手の考えを聴くことよりも、自分の考えを優先する」という実態が明らかとなり、そこで、大きな視点の転換を試みた。「話し合い」から「聴き合い」への視点の転換である。

「聴く」ことに焦点化して実践研究を進め、その手立てとして「聴くマナー」や「聴くスキル」を設定し「双方向に聴き合う」活動を授業の中核に据えた。

二年次研究の本年度は、聴き合う必然性のある学習課題の設定や、双方向

校 告
研 報

平成29～30年度 国立教育政策研究所

教育課程研究指定事業「論理的思考」

主体的に聴き、自分の考えを深め、広げていく子どもの育成

新潟市立新潟小学校

一 本研究の社会的背景

AIの進歩、IoTの広がり、ビッグデータ解析等の先端技術の開発により、今後、世界は国境を越えた交流がますます盛んとなり、多様性が高まっていく。

そこでは、様々な価値観の人々と協働していくことが重要であり、これまで以上に論理的思考力が必要となる。

このような社会的背景の下で進められている国研の指定研究「論理的思考」を受け、二年目の最終年次となった。

二 研究概要

一年次、子どもたちの論理的思考力を伸ばすために、今の授業をどう改善していくか原点に立ち返り検討した。

当校児童の「相手の考えを聴くことよりも、自分の考えを優先する」という実態が明らかとなり、そこで、大きな視点の転換を試みた。「話し合い」から「聴き合い」への視点の転換である。

「聴く」ことに焦点化して実践研究を進め、その手立てとして「聴くマナー」や「聴くスキル」を設定し「双方向に聴き合う」活動を授業の中核に据えた。

二年次研究の本年度は、聴き合う必然性のある学習課題の設定や、双方向

での「聴き合い」を通して、他者と自分の考えの相違点や関係性を捉えることで、論理的思考力の発揮を促す授業の在り方を探っている。

三 研究発表会(十一月二日)

プログラミング教育や「特別な教科道徳」を含めた七つの授業を公開した。

県内各地から百名近い参会者を得て、協議会では活発な議論が繰り広げられた。聴き合いは成立していたか？ 教科の見方・考え方を働かせて考えを深めていたか？ など、子どもの事実に基づいて成果と課題を明らかにすることができた。

また、講師の有本淳様(国立教育政策研究所)のご講演では、授業改善の視点として、批判的思考を働かせて「知の更新」を進めることや本研究の価値付けについて示唆をいただいた。

四 今後の展望

研究発表会で頂戴した貴重なご意見を、更なる授業改善につなげ、「主体的に聴き、自分の考えを深め、広げていく子ども」の具現化を進めていきたい。そして、本研究が「未来を切り拓く力を育む教育課程」を創造する一助になることを願っている。

大会の概要

全連小・函館大会報告

第七十回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会が、十月四日・五日、函館市を会場に開催された。北海道胆振東部地震による甚大な被害を受けた中、北海道小学校長会が全力を挙げて会の開催に至った。全国から約二千五百名の会員が集まり、新潟県からも四十七名が参加した。

本大会では、第六十五回三重大会から続く大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」が掲げられている。そして、これまでの五年間の研究成果と課題を受け継ぎ、「ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる 学校経営の推進」が副主題として設定された。

一日目の午前は開会式のあと文部科学省教育課程課長の望月禎氏より、新学習指導要領を確実に実施することやその内容について詳しい説明があった。今だけでなく将来を見据え、優れた日本の教育を伝え、更に育てていくことの重要性が強調された。

午後は、五領域十三分科会に分かれて研究協議が行われた。各分科会の主旨や研究の視点、発表内容がホームページで公開され、会員は事前に読み込

みでの参加となった。「校長の果たすべき役割と指導性」についてグループで検討する場が設けられ、分科会ごとに参加者の考えを「アナライズカードを使って視覚化する」工夫がなされていた。

二日目の全体会では、研究協議のまとめとして、次の重要性が確認された。

一 明確な経営ビジョン

地域に発信・共通化↓地域連携

二 学校のチーム力向上

情報・目標の共有化↓成果と

改善点を検討

その後、八項目の決意が大会宣言として確認された。

シンポジウムでは、葛西紀明氏（スキージャンパー）、佐藤麻美氏（北海道テレビアナウンサー）、青田基氏（北海道PTA連合会顧問）の三氏から「ふるさと・挑戦・未来創造」をテーマに子どもたちの未来に向けてのメッセージを拝聴した。「未来を創造するにはまず夢をもつこと」「夢を諦めずに挑戦すること」「夢は努力でかなえること」との言葉が心に強く残った。

閉会式では、次期研究協議会が、秋田市で開会されることを確認し、本大会を終了した。

大会の概要

関ブロ・長野大会報告

第七十回関東甲信越地区小学校長研究協議会長野大会が、長野市を会場に六月七日・八日の二日間の日程で開催された。参加総数は九百名を超え、本県からは四十七名の会員が参加した。

全連小大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の下、理念を更に推し進めることを目指して

副主題「地域の自然・文化・人々の生き方に学び 豊かな発想力・創造性や人間性を身に付け 自ら未来社会を拓いていく子どもへの育成」が設定され、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について協議した。

大会一日目は、開会行事と記念講演が行われた。中村祥一関東甲信越地区小学校長会連絡協議会長は、「本大会の特徴である熟議を行う中で、その英知を遺憾なく発揮して研究協議を深め、学校経営に生かすことを願っています。」と挨拶された。「都県だより」では、大野雅人県小学校長会長が、新潟市への包括的権限移譲から一年を経て、役員組織、諸会議、各部の活動の見直しを図ってきたことを報告した。

続く講演会では、宇宙科学研究所宇

宙飛翔工学研究系教授・川口淳一郎氏の「やれる理由こそが着想を生む。『はやぶさ式思考法』と題した講演を拝聴した。教授は「はやぶさ2」が近々小惑星リュウグウに接近するという話題も絡め、普段、宇宙とはあまり関わりのない私たちにも分かりやすく話してくださった。

二日目は、五領域十二分科会二十四分散会に分かれて研究協議が行われた。新潟県からは、二名の会員が研究発表を行った。健全育成分科会では、中村豊柏崎市立榎原小学校長が「RIPDCAを採り入れた教育活動の推進」について、連携・接続分科会では渡辺真也新潟市立牡丹山小学校長が「学びをつなぐ校種間連携の推進」についてそれぞれ提言した。

各分散会では、提言や発表について熟議（熟慮と議論）を深め、子どもたちを「うち」からバランスよく育む教育という本大会の趣旨に沿った、充実した時間となった。

最後に第七十一回関ブロ大会が千葉市で開催されることを確認し合い、本大会が終了した。



関川が与えたもの

現在勤務する富岡小と南に位置する稲田小の校区を合わせた地域は「新道区」と呼ばれている。平成二十九年度作成の郷土誌「新道区のあゆみ」から地域の成り立ちを中心に紹介する。

関川の橋が稲田の街を生んだ？

稲田を中心に新道区が頸城の地の交通の要衝となったのは、高田城が築かれ、稲田に橋が架けられてからである。高田城の建築のため、複雑に流れる関川を整理し、新しい川を掘り抜いた。新道区を南北に、今の子安辺りから上越大橋下流付近までである。そして、川幅が比較的狭い、今の稲田付近に荒川橋（今の稲田橋）が架けられた。

上越地域は、北陸方面や佐渡・新潟方面からの街道の結節点である。江戸幕府は、特に東側からの往来を制御するため、関川に架ける橋は、荒川橋（稲田橋）だけとした。そのため、稲田は、武士・町人が住む城下町と、農民が暮らす農村を結び付ける接点となった。また、関川を利用した舟運の荷上場もあり、人や荷物が行き交う交通運輸の要衝となり栄えた。

ちなみに、新しく掘り抜かれた川は、新川と称していたのが、荒川と呼び方

が変わっていった。高田地域の学校の校歌に荒川の名称が入っていることがある（当校もそうである）。最近まで、荒川を関川の名称のように使っていた名残であることが分かる。

伊達政宗の御仮屋

高田城築城と城下町建設という大土木工事を、普請総裁として取り仕切ったのが、仙台藩主の伊達政宗である。政宗は、築城にあたり、富岡の西寄り、北田屋新田から続く微高地を選び、仮の館「御仮屋（おかりや）」を設けた。そこから高田まで工事監督に出掛けた。

高田城が築城されるまでは、直江津に福島城があった。御仮屋は、高田城と福島城のほぼ中間地点にある。福島城から御仮屋まで4km。一里の距離になっているのは、偶然なのか意図的なのか興味深い。また、南北に一直線になっているのも不思議である。



地理院地図より作成

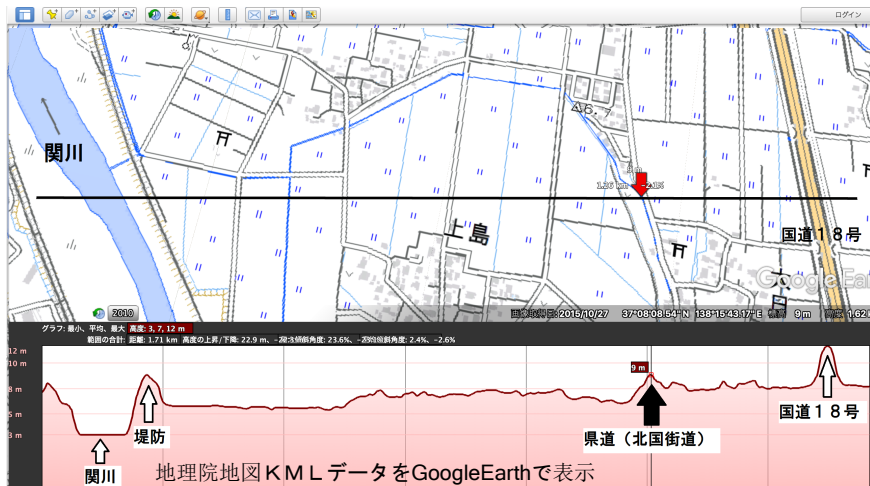
神社の配置と県道の蛇行のわけ

三年生が校区探検に出掛けると、各集落に必ず神社があることに気が付いた。新道区内には、全部で十七の神社があり、多いのは神明宮・神明社・神明神社で十社になる。これは、五穀豊穡を願う神が祀られている神社であり、この地域が水田や新田開発で発展してきた地域であることが分かる。また、境内に洪水から村を守るための水神が祀られている所もあり、水との関いがあったことが分かる。

学習のゲストティチャーとして招いた神主さんから、神社のある所は、災害が少ないと話を聞いた。しかしながら、新道地区は水害に悩まされてきた地域である。関川に架かる稲田橋も幾度となく流されている。

富岡小学校の前を通る県道板倉直江津線は、昔は佐渡から江戸に向かう北国街道であった。主な集落は、この県道沿いに位置し、県道から離れた集落は、新田開発で生まれたものが多い。

この県道は、不思議と緩やかな曲折を繰り返している。今のような堤防がない時代の関川は、不規則に曲がりくねって流れており、川の流れに沿って、自然堤防が作られた。自然堤防の上は、水はけがよく集落が出来やすい。集落と集落をつないで出来た道が、今の道筋になっており、結果として道が緩やかに曲折していると推察する。



実際に県道の高さと川の高さをグローバルースで調べてみた。県道は、概ね9m程度の微高地を選んで通っている。そのため、道や集落のある場所は水害に遭いにくいことが分かる。神社のある場所が災害に水害が少ないのは、災害に遭いにくい適地であり、神主さんの話の通りであった。

高田平野を形作った関川は、用水として恵みを与えてくれるだけでなく、今も交通や生活に影響を与えている。

市
都
市
令
指
定
郡
政
だ

学校改善を目指し、共に学ぶ

南魚沼郡市小学校長会

南魚沼は首都圏から本県への玄関口

にあり、美しい自然や多くのスキー場・

温泉を有する他、日本一のブランド米

「魚沼コシヒカリ」の産地でもある。

校長会は、南魚沼市十八名と湯沢町

一名の十九名で組織されており、地域

の信頼を得るべく創造的な学校経営を

目指して日々取り組んでいる。一方で

学校の統廃合が進んでおり、小学校だ

けでもこの十年間で六校、今年度末で

更に一校減となる。他にも統合協議が

進んでいる学校があるため、今後は会

員減が活動に及ぼす影響が懸念される。

連携を重視した活動の推進

学校経営者としての職能の向上を期

するとともに、親睦を図ることを目的

とし、研究・講習会・講演会・協議会・

視察等の事業を行っている。定例校長

会は年六回で、各種研修や情報交換を

通した学校間連携の強化に力を入れて

いる。また、対策部・研修部・福利部・

広報部による活動、郡市教育研究会の

事業推進にも努めている。

なお、二〇二〇年には中越地区研究

集会を主管することになっている。小

学校長会の充実・発展のため、当地域

の魅力と会員の英知を結集して準備を

進めているところである。

研修を通して校長力を高める

新学習指導要領への対応をテーマと

して全員がレポートを持ち寄り、自校

の取組や他校の実践から、校長の役割

について協議し、研修を深めている。

地域巡検研修では、昨年度、魚野川

の川舟と六日町宿、開通直前の八箇峠

トンネルの見学を行い、南魚沼地域の

交通の歴史と展望についての見識を深

めた。今年度は、旧三国街道を訪ね、

三俣の脇本陣を中心に研修を深める予

定である。また、地元企業の経営戦略

に学ぶ講演会等も行うことで、校長自

身が地域の歴史や産業などの教育的資

源を知り、どう生かしていくか考えて、

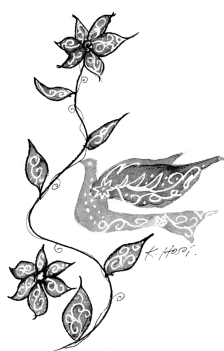
各校の実践に結び付けている。

互いの絆を強め、共に学び、高め合

いながら、地域全体の教育発展のため

に不断の学校改善に尽力していきたい。

(



学校紹介

郷土への愛着と誇りを育てる 糸魚川ジオパーク学習

糸魚川市立糸魚川東小学校

糸魚川東小学校は、糸魚川駅の東一・

四kmの住宅地に位置している。全校児

童二九三名、十四学級である。

当校の特色ある教育活動は、「ジオ

パーク学習」である。糸魚川市は、日

本最初の「ユネスコ世界ジオパーク」

の認定を受け、市内に二十四のジオサ

イトが点在する。ジオパーク学習とは、

糸魚川の豊かな大地と、その環境の中

で営まれてきた人々の生活や歴史・文

化を学び伝える学習である。

ヒスイ峡探索と勾玉づくり

三年生は、小滝ヒスイ峡を学芸員の

案内で探索した。ヒスイ峡の巨大なヒ

スイの原石に触ると、児童から驚きの

声上がる。また、長者ヶ原考古館で

は、遺跡から出土したヒスイ製品を見

学したり、加工技術の説明を受けたり

した。その後、滑石を使って勾玉づく

りを体験した。神秘的な大地の恵みと、

太古から続くヒスイ文化を知り、児童

の郷土への関心は一層高まる。

「塩の道」探検と塩づくり

毎年、四年生は、「塩の道」(松本街

道)を歩く。児童は、新緑の古道を楽

しみながらも、何十キロもの塩や海産

物を運んだ歩荷や牛方の苦勞に思いを

はせる。

また、炎天下の砂浜に二十メートル

四方の塩田を作り、当時の製法(揚浜

式)で、塩づくりにも挑戦した。

学びの成果は、壁新聞にまとめたり、

文化祭で発表したりした。

郷土への愛着と誇り

一昨年、糸魚川駅北大火の直後、六

年生は「自分たちにできることは何か」

を真剣に考え、自ら行動した。

糸魚川の自然、

歴史、文化、そし

て人々と深く関わ

る「糸魚川ジオパ

ーク学習」は、児

童の郷土への愛着

と誇りを確実に育

んできたことを実

感した。



県小学校長会
HPへアクセス



学校経営に役立つ
情報満載